

景観整備がまちづくりに及ぼす効果に関する研究

— 神田川ふれあい広場を事例として —

A Study on Effects for Town Planning by Landscape Improvement

-A Case Study of Kanda River Fureai Plaza-

○野中美貴子¹, 阿部貴弘²

*Mikiko Nonaka¹, Takahiro Abe²

Abstract: Fujinomiya city has worked on landscape improvement over many years. Evaluating these approaches is effective for town planning. This study analyzes effects by landscape improvement in Kanda River Fureai Plaza. Additionally, it aims to clarify the mechanism of the effect's appearance.

1. はじめに

長年にわたり景観形成に取り組んできた富士宮市では^[1], 富士山の世界遺産登録を契機にこれまでの景観形成を背景として, 新たに「世界遺産のまちづくり」に取り組んでいる (Table 1). この「世界遺産のまちづくり」の最初の事業として, 神田川ふれあい広場において景観整備が行われ 2016 (平成 28) 年に竣工した.

景観整備においては, まちづくりに及ぼす効果を意識した事業推進が重要であり^[2], 神田川ふれあい広場においても, そうしたまちづくりに及ぼす効果を評価・検証することが, 今後の「世界遺産のまちづくり」の推進に向けて有効であると考え.

そこで本研究は, 神田川ふれあい広場の景観整備がまちづくりに及ぼす効果を把握するとともに, 効果発現の仕組みを解明することを目的とする (Figure 1).

Table 1. List of approaches

年代	富士宮市における景観整備に関する取組み
1995 (平成 7) 年	富士宮市都市景観形成ガイドプラン 策定
1995 (平成 7) 年	都市景観条例 施行
2011 (平成 23) 年	富士山 国史跡 指定
2012 (平成 24) 年	富士宮市景観計画 施行
2013 (平成 25) 年	「富士山-信仰の対象と芸術の源泉」 世界文化遺産 登録
2014 (平成 26) 年	富士宮市世界遺産のまちづくり整備基本構想
2015 (平成 27) 年	神田川ふれあい広場 整備開始
2016 (平成 28) 年	神田川ふれあい広場 竣工
2017 (平成 29) 年	世界遺産センター 竣工予定
2017 (平成 29) 年	富士山本宮浅間大社東側私有地整備事業 (通称元気広場) 取組み着手

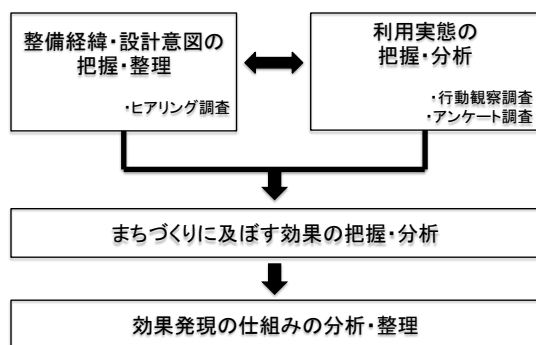


Figure 1. The flow of this study

2. 研究対象

神田川ふれあい広場は, 富士宮市の中心部に立地し, 富士山本宮浅間大社の境内に位置する (Figure 2).

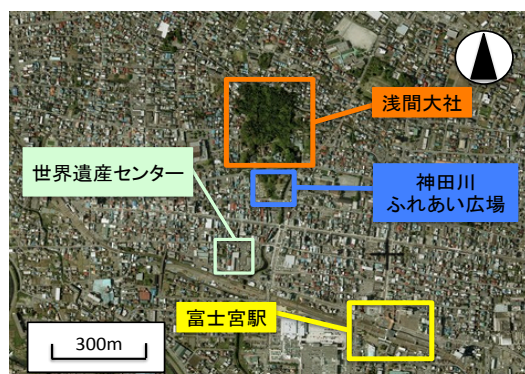


Figure 2. Map of Fujinomiya city

3. 研究方法

(1) 再整備に至るまでの経緯や意図の把握・整理

富士宮市役所および設計事務所へのヒアリング調査をもとに, 再整備までの事業展開を整理する.

(2) 現在の広場の利用実態の把握・分析

広場の利用状況を把握するため, 2017 年 8 月 25 日 (金) 及び同 27 日 (日) の 2 日間, 10~18 時で現地アンケート調査及び行動観察調査を行い, アンケート考査は 25 日は 120 通, 27 日は 133 通の回答を得た.

(3) まちづくりに及ぼす効果の把握・分析

以上の調査結果を踏まえ, 景観整備がまちづくりに及ぼす効果を把握・分析する. その際, 既存研究^[2]で整理されている「取組みポイント」及び「まちづくり効果」を分析視点とする.

4. 調査結果

(1) 設計事務所へのヒアリング調査結果

神田川ふれあい広場を設計した設計事務所の担当者

1 : 日大理工・学部・まち 2 : 日大理工・教員・まち

に対して、2017（平成 29）年 8 月 1 日にヒアリングを行った。その結果、以下の通り広場の設計にあたっての主な留意事項を把握した。

- ・ まちの資源である富士山や浅間大社に配慮して、世界遺産にふさわしい広場設計をめざした。
- ・ 幅広い年代、遠方からの利用者を想定した。
- ・ 休憩・遊びの利用を想定し滞留空間をめざした。

(2) 行政担当者へのヒアリング調査結果

神田川ふれあい広場の再整備にあたった富士宮市役所富士山世界遺産課と観光課の担当者に対して、2017（平成 29）年 9 月 5 日にヒアリングを行った。その結果以下の通り事業実施の際の主な留意事項を把握した。

- ・ 当初は、老朽化した遊具の改修が検討されていたが、世界遺産登録を機に遊具単体の改修から広場全体の改修へ変更するに至った。
- ・ 富士宮市世界遺産のまちづくり整備基本構想^[3]に基づき再整備を行った。

(3) 現地アンケート調査結果

現地アンケート調査では、利用者の年代・居住地・滞在時間・利用方法・改修前後の意識変化・滞在範囲などの項目を調査した。

調査結果から、利用者の年代は幅広く、富士宮市内外からも利用者が訪れていることが分かった。また、滞在時間も長く、滞留空間として認識されていると推察できた。これらは全て、設計意図を反映した結果となった。しかし、Figure 3 のように世界遺産とのつながりやまちの資産としての認識は広まっておらず、人々の意識は十分には変化していないことも分かった。

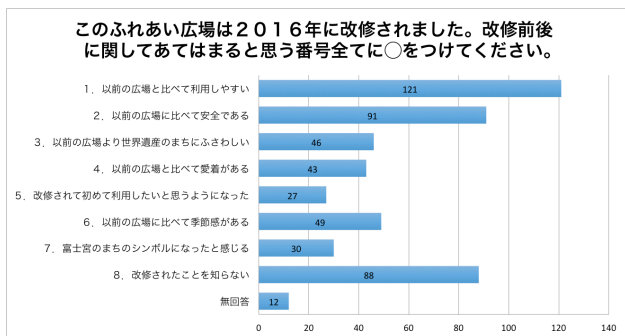


Figure 3. Consciousness of users

(4) 現地行動観察調査結果

現地行動観察調査の結果、芝生広場及び池においては、主な利用方法は休憩・遊びであり、設計意図が反映されている。一方、土系舗装のエリアについては、イベント利用のみで普段は利用されていないことが課題として指摘できる。さらに、池での水遊びは夏場に限定されると推測できることから、冬場の利用を課題として挙げることができる。

5. まとめ

(1) 分析結果

神田川ふれあい広場における景観整備の取組みについて、Table 2 に示す効果発現のための取組みポイント^[2]を用いて検証する。

Table 2. Points of efforts

効果発現のための取組みポイント	
A	まちづくりにおける事業の意味を考える
B	与えられた整備範囲の中だけで考えない
C	制約を取り払って考える
D	事業の目標・方向性を定め、継承する
E	専門家の知恵を加える
F	事業の検討体制を整える
G	まちに対する関心を育てる
H	どう使い、育てるかを地域と一緒に話し合う
I	地域の本当に大切なものを見つけ出す
J	創出される施設や空間のイメージを伝える
K	創出された施設や空間を多くの人に知ってもらう
L	継続的に話し合う機会をつくり出す

神田川ふれあい広場では、設計当初から「世界遺産のまちづくり」を意識していたため、A・B・I・J の取組みポイントは実施されていた。さらに、基本構想等に基づき D・F の取組みポイントも実施されていた。しかし、整備スケジュールが短期間だったこともあり、住民参加に関連した G・H・L の取組みはされていなかった。

次に、Table 3 に示す視点^[2]から効果を把握・分析する。

Table 3. Effects of town planning

まちづくり効果の種類	
①	人々の意識
②	人々の行動
③	組織・制度
④	空間・都市
⑤	技術
⑥	地域の経済
⑦	外部評価

神田川ふれあい広場の整備においては、全ての効果が発現していると考えられるが、効果①については、アンケート調査や取組みポイントからも分かるように十分には発現していない。一方、取組みポイント D・E・F は、効果③の発現に直結していることが分かる。

(2) 考察

分析結果より、景観整備による効果を発現するためには、具体的な目標を設定し、関係者間で共有することが重要であると考えられる。神田川ふれあい広場の景観整備においては、整備当初から「世界遺産のまち」というまちづくりの方向性が共有されていたことから、多様な効果が発現していると考えられる。

6. 今後の課題

利用者の動線を明らかにするなど、行動観察調査結果を踏まえ、分析をより精緻なものとする。さらに、特に効果④について、発現の仕組みを明らかにする。

7. 参考文献

[1] 三宮翔平:「景観施策の変遷に関する基礎的研究-静岡県富士宮市を事例として-」, 日本大学理工学部社会交通工学専攻修士論文, 2013 年
 [2] 国土交通省国土技術政策総合研究所:「まちづくり効果を高める公共事業の進め方(案)」, 国総研資料, 第 808 号, 2014 年
 [3] 富士宮市:「富士宮市世界遺産のまちづくり整備基本構想」, 2015 年
 [4] 地図出版:国土地理院